

目的 ミシン縫目の糸調子調整は縫製の準備段階として避けられない作業にもかかわらず、その方法は試行錯誤を伴う経験的な目測で行なわれている。特に学校教育現場では、縫製経験の少ない低年齢ほどミシン指導に多くの問題をかかえている。そこで、本研究では、ミシン調整をする際に縫目状態をどのように判断しているかということを経験別集団において検査し、合理的なミシン調整方法の確立を目指すものである。

方法 試料布にはシーキングを用い、布の厚さ3種(2, 4, 6枚重ね)、縫目密度3種(4, 5.6, 7目/cm)毎にミシン調整用縫糸を用いて縫目状態を積極的に9段階(上系つれー良好ー下系つれ)の試料を作成し、縫製経験の異なる集団として中学生、高校生、大学生、専門学校生を対象に官能検査を行った。

結果 (1)中学生から専門学校生となるに従い、良好な縫目状態を“善い”と評価する割合が高く、上系(下系)つれの縫目は“悪い”と評価する割合が高かった。しかし、中学生は全般にどの縫目状態をみても“善い”、“悪い”とする人数に差が少なく、判断力が低いことがわかった。また、専門学校生は全般に評価が厳しい。(2)布の厚さが厚くなるに伴い、どの集団も最もつれた縫目状態では評価が甘くなり、良好な縫目状態では薄い布の方が評価がきびしくなった。(3)縫目密度が大きくなるに伴い、どのような縫目状態の試料においても評価が厳しかった。(4)同じつれ具合の試料を上系つれとして見た場合と下系つれとして見た場合には、下系つれとして見た場合の方がよい縫目とみえる傾向があった。